

白山源三郎・三隅達郎にみる日本における初期のレクリエーション観
～関東学院大学でのインタビュー（1980年1月13日）を中心に～

- 鈴木 秀 雄 （関東学院大学）
矢 川 律 子 （東洋大学短期大学）
石 井 允 （立教大学）
野間口 英 敏 （東海大学）
坂 口 正 治 （東洋大学短期大学）

キーワード：白山源三郎、三隅達郎、

レクリエーション観、レクリエーション運動(Movement)・活動(Activity)

1. はじめに

昭和18年の暑い夏、三隅は、熱海での家族旅行からの帰り、車中で偶然、水泳競技会から帰る白山に巡り合い、“白山先生ですね！”と声をかけるのである。これが長い人生の中での正式な二人の出会いとなる。白山は、戦前日本で初めて国際競技会として開催された第3回極東選手権の水泳競技で活躍し、名を馳せていた。その時既に、人間の虐待としてのスポーツに疑問を抱いていた白山にとって、第10回ロスアンゼルスオリンピック大会に米団駐在委員として滞米中、会期前に同地で開催された第1回世界レクリエーション会議に出席し、初めて“レクリエーション”を体験し、この運動を日本にも展開しなければと直観的に閃き、強く認識するのである。白山はインタビューの中で“私はこの時に‘レクリエーション’をひらって（拾って）きた”と述懐している。翻って、三隅は、学生時代より、福祉活動に興味と関心を抱き、グループワークを学ぶことになる。このグループワークの視点からレクリエーション活動の展開と共に組織キャンプへの関わりを強くしていくのである。白山によれば、レクリエーションにとってオリンピックは、浸潤力を増すための展着材であると感じ取り、三隅は、世界レクリエーション会議がレクリエーションの一般化を促進するための普及材と考えていた。白山は Movement としてのレクリエーションを捉え、Activity としてのレクリエーションを三隅は専門家として展開していくのである。早、インタビューから15年の歳月が流れ、最早テープでしか話を聞くことができない。先達の偉業を明かにすべきところにも本研究の本意を置くべきであろう・・・

11. 研究の目的

Play Unite the Nations（遊戯は世界国民を結合する）という標語の下、4万人を集めたロスアンゼルス会議は、次第にドイツのKDF（Kraft durch Freude=喜びを通じて力へ）そしてイタリアの“ドボ・ラボロ（労働の後）”というようにレクリエーションは国家総動員体制に利用され、日本に導入されたレクリエーションも時代の中で本来の意味あいからは逸脱し、揺れ動きつつ今日に至っている。白山や三隅が感じ取ったレクリエーションは何であったかを明らかにし、「初期のレクリエーション観」を探るものである。

111. 研究の方法

本研究は、白山源三郎・三隅達郎の“初期のレクリエーション観”を探るにあたり、標題のインタビュー及び座談会から First-Hand として得られた資料及びそれらの内容を検証するため参考となる文献資料により、初期のレクリエーション観の研究がすすめられた。

《 検証（参考）文献・資料 》 ※年号は、文献・資料で用いられている表記に従った。

- 1、関東学院大学六浦キャンパス体育館実験研究室及び料亭“金沢園”において行われた両氏へのインタビュー及び座談会（1980年1月13日（日））
- 2、インタビュー及び座談会より得られた内容の検証資料としての参考文献
 - 1）白山源三郎『レクリエーション』同文館、昭和24年5月
 - 2）白山源三郎「レクリエーションの“経済問題”の側より見た一面」『教育委員会報』熊本県教育委員会、1952年8月
 - 3）白山源三郎「関東学院、約百年に及ぶその歩みと、われらの反省」『道しるべ～関東学院とキリスト教教育～』関東学院編、ヨルダン社、1987年
 - 4）白山源三郎「座談会～創設のころ～」昭和54年5月12日（土）、『関東学院大学三十年の歩み』昭和55年1月
 - 5）白山源三郎「レクリエーション指導者養成について」『レクリエーション資料』北海道教育委員会、昭和25年2月
 - 6）白山源三郎「レクリエーション哲学」『第2回レクリエーション・ワークショップ記録』国際基督教大学レクリエーション研究会、1958年
 - 7）白山源三郎「世界レクリエーション大会の開催」『日本レクリエーション協会二十年史』日本レクリエーション協会編、昭和41年11月
 - 8）白山源三郎「「レクリエーション - 日本」の夜明け」『日本レクリエーション協会三十年史』日本レクリエーション協会、遊戯社、昭和52年
 - 9）三隅達郎『レクリエーションハンドブック』国土社、1961年7月
 - 10）三隅達郎『レクリエーション』民主教育協会、1968年6月
 - 11）三隅達郎『レクリエーション概論』ベースボールマガジン社、1974年
 - 12）三隅達郎「レクリエーションへの想い～レクリエーション・レジャー・余暇～」『レクリエーション研究』第6・7合併号、日本レクリエーション研究会、1970年3月
 - 13）三隅達郎「レジャーを考える」『レクリエーション研究』第5号、日本レクリエーション学会、1975年6月
 - 14）三隅達郎「利休百首に習ぶ ～ある指導技術論～」『関東学院大学文学部紀要』第13号、1974年12月
 - 15）三隅達郎「キャンプの施設について」『レクリエーション資料』北海道教育委員会、昭和25年2月
 - 16）三隅達郎「日本厚生協会の成立から終戦まで」『日本レクリエーション協会二十年史』日本レクリエーション協会編、昭和41年11月
 - 17）三隅達郎「故上田久七君をおもう」『レクリエーション資料』北海道教育委員会、昭和25年2月
 - 18）三隅達郎「日本厚生協会の発足と歩み」『日本レクリエーション協会三十年史』日本レクリエーション協会、遊戯社、昭和52年
 - 19）松原五一『レクリエーションの心』日本レクリエーション協会編1980年
 - 20）文部省『青年の体育・レクリエーションの手引き』昭和28年12月
 - 21）全国高等学校長会『レクリエーションの計画と指導』東洋出版、昭和26年

- 22) 文部省『職場におけるレクリエーション』中和印刷、昭和25年8月
- 23) 鉄道省『キャンプの仕方とその場所』実業の日本社、大正15年6月
- 24) 磯村英一『厚生運動概説』常磐書房、昭和14年1月
- 25) 横浜市体育史編集会議『横浜スポーツ百年の歩み』平成元年3月
- 26) 横浜市レクリエーション協会『横浜市レクリエーション史』昭和62年
- 27) 高野利治『関東学院百年史』神奈川新聞社、1984年10月6日
- 28) 第13回全国レクリエーション大会神奈川県委員会事務局『第13回全国レクリエーション大会報告書』昭和35年3月
- 29) 鈴木秀雄「レクリエーション指導者“資格”のねうちと流通度」『レクリエーション』（財）日本レクリエーション協会刊、No.230,1979年12月
- 30) 鈴木秀雄『セラビュリティックレクリエーション』講談社、1985年3月
- 31) 高橋和敏・坂口正治「厚生運動の一考察 ～特に社会情勢とのかわりに於て～」第8回日本レクリエーション学会発表資料、1978年10月

IV. 考察

先見性を自らに課し、常に将来性を見極めて行動した白山にとって水泳活動への関わりや航空交通論に将来を期待したのも決して誤りではなかった。それらは三隅のキャンプと同様、自己実現として自らへのレクリエーションでもあった。白山は水泳や航空に関係し、“地に足が少しもついていない”というユーモア溢れる語り口にさえ自信と誇りが窺えた。レクリエーションの専門家をめざさず、レクリエーション学の確立よりも、戦後のすさんだ社会を立て直すために厳しい労働が待っている現実を踏まえてのレクリエーション運動の展開をめざし、レクリエーション活動の専門性については、三隅の指導性が重要と、日本で最初の講習会を関東学院大学において白山・三隅の指導の下、アメリカ型のレクリエーションの理解を求めて横須賀米軍基地での研修も既に取り入れている。白山が日本での指導者養成を早い時期に訴え、指導者が育成され始めると“Give and Take”の発想で、指導者は相互に影響を与えあうべきだと三隅はグループワークの視点でワークショップの開催をめざすのである。“運動論の白山、活動論の三隅”その論点は学会で詳述する。

V. まとめ

学会活動にも大いに尽力された両氏であるが、第25回日本レジャー・レクリエーション学会が記念大会として開催される動きを見るとき、なにかしら両氏の導きのような熱い思いを感じざるを得ない。今後の運動・学会の発展を念じつつ、心から両氏の御冥福をお祈りしたい。なお、本研究においては、両氏の敬称を部分的に省略させていただいた。

【 両氏の経歴 】

白山源三郎 明治31（1898）年10月4日生まれ、大正10年3月神戸高等商業学校卒、同13年3月京都帝国大学経済学部を卒業し、京都市立第二商業学校教諭を経て、昭和2年4月、関東学院高等商業部教授となり、以後、同学院高等商業部長、同航空工業専門学校校長を歴任し、昭和10年には、関東学院理事に就任した。昭和24年学制改革による新制大学への転換に伴い、同大学の初代大学長に就任。昭和29年4月、再度関東学院大学長となり昭和41年4月まで在任、その間、昭和34年6月、関東学院副学院長、昭和40

年4月、関東学院長をつとめ、昭和43年4月、学校法人関東学院理事長に就任した。昭和50年4月同学院顧問、昭和54年4月、関東学院名誉教授となった。同氏のレクリエーション関連の社会教育、社会奉仕活動は以下のとおりである：（1）日本レクリエーション協会専務理事、後に、財団法人日本レクリエーション協会理事（昭和23年以来、同協会の理事を歴任、昭和39年世界レクリエーション大会（大阪）運営委員、昭和42年同協会顧問）、（2）財団法人日本水泳連盟（昭和10年以降、昭和47年迄、同連盟常務理事を歴任、昭和49年同連盟顧問、昭和6年、第10回オリンピック大会（ロスアンゼルス）米国駐在委員、この折、第1回世界レクリエーション会議に出席、昭和11年第11回オリンピック大会（ベルリン）日本チーム役員、第2回世界レクリエーション会議に出席、昭和35年第17回オリンピック大会（ローマ）役員、昭和39年オリンピック国際水連委員）、（3）財団法人日本学生航空連盟（昭和34年以降、同連盟理事）、同氏は、昭和43年11月3日、勲三等旭日中綬章受章の栄に浴し、昭和42年横浜文化章、昭和54年神奈川文化章をそれぞれ受賞した。昭和60年9月21日午前零時45分肺炎のため、神奈川県立長浜病院で死去、86歳。政府は昭和60年10月11日の閣議で同氏に従四位を贈ることを決定。

三隅達郎

明治32（1899）年4月10日生まれ、大正14年4月、早稲田大学政治経済学部卒業、学生時代より隣保事業に関心を持ち活動、昭和6年、カナダ・トロント大学社会科学科（現社会事業大学院）に3年間在籍し、特にグループワークを専攻し卒業、大正14年4月から昭和14年3月まで東京東部地区において、社会福祉事業、特に隣保事業に従事、昭和14年8月から15年6月、財団法人協調会参事、産業福利部に勤務、昭和15年7月から18年7月、大阪市厚生協会主事、レクリエーション運動に従事、昭和18年8月から21年3月、財団法人日本厚生協会主事、厚生省嘱託（レクリエーション運動）、昭和21年4月から24年3月、財団法人協調会に復帰、10月改組された財団法人中央労働学園参事、昭和24年4月から27年3月、学校法人中央労働学園大学教授（資格認定昭和24年2月教授、社会事業概論、体育・レクリエーション担当）（昭和26年9月法政大学に合併さる）昭和27年4月から36年3月国際基督教大学助教授（レクリエーション）兼レジスタラー、昭和36年4月から42年3月、同大学教授（レクリエーション論）兼ディップェンドルフ記念館長、昭和42年4月から同大学客員教授（非常勤として講義のみを担当）、昭和43年4月から53年3月、関東学院大学文学部教授（レクリエーション原理他担当）、この間、日本レクリエーション協会理事、東京都ユースホステル協会顧問、日本YMCA同盟キャンプ委員会委員長、白山氏と共に日本レクリエーション学会（現日本レジャー・レクリエーション学会）名誉会員、日本キャンプ協会との関わりも深く、1966年常任理事、1970年副会長、1984年会長、1990年、社団法人日本キャンプ協会となり以後顧問を歴任、平成6年（1994年）5月5日午後8時20分心不全のため市川市の病院で死去、95歳。